目録

第一課　昭憲皇太后御歌……一
第二課　太田道灌……四
第三課　先づ農を重んぜよ……八
第四課　松の根……十二
第五課　蒔かぬ種は生えぬ……十五
第六課　盤珪禪師……十九
第七課　野火止の用水……二十一
第八課　洞庭湖……二十六
第九課　契約……三十
第十課　山村……三十四
第十一課　數へ草……四十一
第十二課　動物を愛せよ……四十二
第十三課　麥秋……五十
第十四課　海の朝……五十三
第十五課　我が國の水産業……五十五
第十六課　フェルデナンド、マゼラン……五十九
第十七課　征衣上途……六十九
第十八課　西洋紙の製造……七十四
第十九課　植附前後の樣子を報ず……七十八
第二十課　害蟲と其の敵……八十
第二十一課　夏の田園……八十六
第二十二課　船津傳次平……九十
第二十三課　漁船歸る……九十六
第二十四課　廣瀬武夫の手紙……百一
第二十五課　スパルタ武士……百五
第二十六課　統計……百十一
第二十七課　筏流し……百十八
第二十八課　瀧澤馬琴の苦心……百二十三
第二十九課　足柄山……百二十九
第三十課　郷土……百三十一

高等小學讀本　巻一　虎村用　昭和3年

第一課　昭憲皇太后御歌

人知れず思ふ心のよしあしも
　照らし分くらん天地の神

怠りて磨かざりせば光ある
　玉も瓦にひとしからまし

神風の伊勢の内外の宮柱

鳴く。蛙が鳴く。蚊が出る。ぶゆが出る。はへが眞黒にたかる。のみがはびこる。かなぶん・瓜ばへ・てんたう蟲、野菜につく蟲は限もない。どうせ取りきれることではないが、捨てて置けば野菜が全滅になる。取れるだけ取らねばならぬ。

手が足らぬ、手が足らぬ。うちの人數だけではやりきれぬ。はては人を雇うて、一段何程の請負で、田も植ゑさせる、麥も刈らせる。それでもまだやりきれぬ。此の頃は、大病人の外は手をあけてゐるものはない。めくらの婆さんでも、手さぐりで茶ぐらゐは沸かす。ゑんどうやいんげんは畠にすゞなりでも、もいで煮て食ふひまはない。

[illegible]餅で[illegible]田もある。近い處は起きぬけに朝飯前の朝作り、遠い畠へは、お春つ子が、片手に大きなやくわん、片手に茶受の餅か何かを入れたふろしき包を重さうにさげ、小さな體をゆがめて持つて行く。

此の季節に農家を訪へば、大抵は戸口がしめてある。猫一匹ゐない家もある。何を聞いても、くるくるとした目を見はつて「知らないよ。」と答へる五つ六つの女の子が、赤ん坊と唯二人留守してゐる家もある。（德富健次郎「みゝずのたはこと」ニ據ル）

第十四課　海の朝

を輕んずるの風あるを憂へ、男子も亦力を盡くして之に從ふべきを說きて、大いに斯業を發達せしむ。又農閑每に青年を集めて修養をすゝめ、讀書・算術・習字・農學を教授せり。彼元來歌文の才あり。時々養蠶・稻作或は里芋・甘藷の培養法等を俗謠體につゞり、自費にて刊行し、之を各地に配付せり。

時に內務卿大久保利通は、產業の發達に力を注ぎ、農業の方面にては農事試驗場を設け、農學校を建てしが、農學の師に理を知つて實を知らざる者多きを遺憾とし、經驗を積み斯道の師表たるべき人物を天下に求めたり。たま〳〵傳次平の事を聞き、群馬縣に出張して彼と會談し、直ちに其の非凡なるを認め、東京の西郊、駒場の農學校に於て實習を指導せんことを勸む。彼容易に動かざりしが、終に利通の知遇に感激して之を諾せり。

當時駒場の地たる、茫々たる荒原なりければ、彼此處に農場を開くに當りて一隅に假小屋を建て、晝は鉢卷・ももひき姿にて人夫等と共に開墾に力め、夜はランプのもとにて農事の調査研究にいそしめり。

一日利通駒場に來り、彼の竹木を切り、亂草を刈り、根を掘り、土を返す等、人夫にまじりて勞働せる姿を見て打驚き、それにては調査の時間あるまじと言ひしに、彼、農事の調査は夜間にて十分なりと答ふ。利通、假小屋中の

10

目録

第一課　農業……一
第二課　村の秋……四
第三課　稲刈……七
第四課　社會奉仕の精神……十
第五課　護國の目と腕……十四
第六課　猫の垣巡……二十一
第七課　海洋……二十八
第八課　ソコトラ島……三十二
第九課　保險……三十八
第十課　鎮守に詣でて……四十三
第十一課　人を紹介する手紙……四十五
第十二課　エジプトの遺蹟……四十六
第十三課　マルコ、ポーロ……五十一
第十四課　植物と氣象……五十七
第十五課　俳句……六十一
第十六課　碧海郡の農業……六十二
第十七課　上毛の三山……六十六
第十八課　山里の夕……七十一
第十九課　農業倉庫……七十五
第二十課　警察と國民……七十八
第二十一課　村上義光……八十二
第二十二課　海苔……八十七
第二十三課　汽船トロール漁業……九十六
第二十四課　福澤諭吉……百五
第二十五課　書簡……百十
第二十六課　故郷の花……百十二
第二十七課　鳥の翼と昆蟲の翅……百十六
第二十八課　春近し……百十九
第二十九課　奉天附近の大會戰……百二十二
第三十課　國史に遅れ……百三十二

高等小學讀本　卷二

農林用

第一課　農業

農業はあらゆる職業の中で、最も身體を健康にするものである。世の中には、日の目も見ずに仕事場で働く者もあれば、一歩も机邊を離れないで、事務に忙殺される者もあるが、農業に従事する者は、終日すがすがしい大氣を吸ひ、快い日光を浴びながら勞働する。人世に於てこれほど人の健康に適する職業が他にあるであらうか。

身體の健康に適する農業は、又よく精神を健全にする。

先づ小麥を蒔いて、後に大麥を蒔くのである。きれいにならした畠は、一すぢ〳〵ていねいに尺竹をあて、繩ずりして、眞直に西から東へ畝を立て、堆肥を置いて土をかけ、七藏が種を振れば、赤ん坊を負つた若いおかみさんが竹杖ついて、片足がはりに南から北へと足で土をかけて、きれいに踏みつけて行く。

二

霜は晴に伴なふ。霜の十一月は、日本晴の明るい〳〵月である。富士は眞白になる。武藏野の空は高く、たゝけばかん〳〵音のしさうな碧瑠璃になる。朝日夕日が美しい。月や星がさえる。田は黄色から白茶になつて行く。此處彼處の雜木林や村々の落葉樹が、最後の榮を示して黄に茶に紅に照渡る。綠の葉の中に柚が黄金の玉を掛ける。光明は空から降り、地からも湧いて來る。小學校の運動會で、父兄が招かれる。白米五合、錢十五錢の持寄りで、村のえびす講がある。日もいよ〳〵短くなる。甘藷や里芋も掘つて穴にしまはねばならぬ。其の中に晩稻も刈らねばならぬ。忙しいには忙しいが、何といつてももうしめたものである。朝霜、夜嵐、晝はのどかな小春がつづく。（德冨健次郎「みゝずのたはこと」ニ據ル）

第三課　稻刈

日は大空に耀き渡り、

麥秋やほこりにかすむ晝の鐘　太祇

五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉

しるなべに笠のしづくや早苗とり　其角

朝露によごれて涼し瓜の泥　芭蕉

白露をこぼさぬ萩のうねりかな　芭蕉

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり　子規

牛叱る聲にしぎたつ夕かな　支考

鞍つぼに小坊主乘るや大根引　芭蕉

大根引大根で道を敎へけり　一茶

水かれて橋行く人の寒さかな　子規

第十六課　碧海郡の農業

愛知縣碧海郡は矢作川に沿へる一帶の地を除くの外、もと概ね地味豐かならず、徒に小松生ひ茂りたる丘陵、若しくは、荊棘にとざされし荒野のみ多く、耕地としては僅かに其の間に散在せしに過ぎざりき。しかのみならず、水利極めて惡しかりければ、夏日旱害頻に至り、農民の困苦は實に名狀すべからざるものありき。

文化の頃、都築彌厚といふ者あり。かゝる農民の困苦を救はんことを思ひ立ち、先づ矢作川の水を分つて郡の西南衣ヶ浦に導く計畫を立てぬ。かくて多大の私財と勞力とを費して測量をへ、幕府に請ひて起工の許可を得たりしが、不幸工事に着手するに至らずして病歿せ

り。幕末の頃、再び用水事業を企つる者ありしかど、頑冥なる農民の妨害に遇ひ、また起工を見ずして止みたり。然るに明治の世に入りて、彼の彌厚が志を繼ぎて更に此の事業を起さんとする者あり。農民亦既に悟りて用水の必要を感ずるや切なり。すなはち一方縣に請願して其の保護を仰ぎ、他方篤志家に說きて其の出資を求め、遂に明治十三年、矢作川より衣浦に至る幹流を開鑿することを得たり。稱して明治用水といふ。爾來益〻其の事業を擴張し、幾多の支流を開き、諸種の施設亦漸く備れり。かくて往年の丘陵荒野は、拓かれて概ね美田と化し、今や此の用水に灌漑せらるゝ耕地は、八千町歩の多きに上る。

用水の開鑿に次いで、碧海郡の農事の發達に與つて力ありしものは、明治三十四年安城に設けられし農林學校の教育なりき。此の學校は、獨り生徒に限らず、廣く農民全體を教導するを以て任となし、百方努力して其の主張の實行を圖れり。されば其の教化は郡の內外に及び、安城附近に移住し來つて學校の指導を仰がんとするものさへあるに至れり。しかのみならず、今や碧海郡の各町村は、此の學校に教育を受けたる青年を活動の首腦者となし、是等青年を中心として老若よく其の和を得、協力一致以て諸種の經營に當るの美風を成せり。

共同的精神は組合事業を營む根柢となるものなり。碧海郡が人の和を得、共同的精神に富むことは、卽ち其の組合事業を圓滿に發達せしむる所以にして、水利組合・信用組合・販賣組合・購買組合・利用組合、其の他郡內に設けられたる諸種の組合は、其の活動實に目ざましきものあり。

かつては丘陵荒野の間に散在して、地の利極めて乏しく、農民の窮乏甚だしかりし碧海郡の寒村は、かくて殆ど其の面目を一新し、田圃連なり人煙接して、活氣橫溢せる富邑となれり。

第十七課　上毛の三山

赤城・榛名・妙義の三山は、余が生まれた高崎あたりから見ると、名工のゑがける風景畫の如く、東北・西北・西の三方に展開してゐて、其の背景には、北に子持・小野子、西に淺間を始め信越の諸山が遠望せられ、西南に秩父の連山が遠く起伏してゐる。片岡の淸水山の如き小高い處から眺めると、赤城の背後に日光の山脈があり、ずつと東南の端には、筑波の峯が夢の如く淡く大空に浮いて見える。又碓氷の中腹から眺め下すと、關八州の平野は上毛の三山からさか落しに東南に開けてゐて、眼界の果を筑波が守つてゐる。其の平野の間を、銀の帶の如く蜿蜒としてうねつて行くのが利根川である。

目録

第一課　九十の春光……一
第二課　春の草……五
第三課　デンマークの農業……七
第四課　ペスタロッチ……二十二
第五課　文字……二十九
第六課　鳥の聲……三十五
第七課　思出……三十九
第八課　噴油……四十三
第九課　農村視察……五十
第十課　蛙……五十三
第十一課　果樹試作場……五十九
第十二課　租稅……六十五
第十三課　阿閉掃部……七十
第十四課　水と風景……七十四
第十五課　天然記念物……七十七
第十六課　會社……八十四
第十七課　市兵衞の話……八十七
第十八課　夏の曉……九十一
第十九課　土に立脚せよ……九十四
第二十課　夕立雲……九十九
第二十一課　地震……百六
第二十二課　日本の風土……百十二
第二十三課　十和田湖の養魚(一)……百十六
第二十四課　十和田湖の養魚(二)……百二十二
第二十五課　罐詰……百二十九
第二十六課　川柳……百三十四
第二十七課　待賢門の戰……百三十六
第二十八課　兒島農場……百四十一
第二十九課　晩鐘……百四十六
第三十課　樂地……百五十二

高等小學讀本　卷三　農村用

第一課　九十の春光

秋の風は泣くなり。冬の風は怒るなり。春の風は笑ふなり。

春の風の吹く處、そこにあわ雪消えて若菜もえ、谷川の氷解けて波の花先づ咲く。枯木活きて芽を吐き、燒痕よみがへりてわらびの柔拳空をつかまんとす。二十四番の風吹盡くして、梅咲き、桃咲き、櫻咲き、九十の春光到る處駘蕩として春の海の如く、人は花に送られ花に迎へられて、心自らのどかなり。

23

は注いで又注ぐ。刈株を引つ反し〳〵働いてゐる人々の周圍から、足下から迫つて、蛙は敏捷に其の手を動かせ動かせと促して止まぬ。蛙がぴつたりと聲をのむ時には、日中の暖さに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草の上にごろりと横になる。

更に夜になると、蛙は如何に自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇るものの如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢると、蛙の聲はめつきり遠く隔たつて、それがぐつたりと疲れた農夫の耳をくすぐつて、彼等を安らかな眠に誘ふのである。熟睡によつて、農夫は皆短い時間に肉體の活力を回復する。彼等が、雨戸のすきまからさす夜明の白い光に驚いて蒲團を蹴て外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に促され、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。

草木はまた遠く遙かに響けと鳴く蛙の聲にゆすられつゝ、夜の間に生長する。櫟や楢や其の他の雜木は、蛙が鳴けば鳴く程、又それが鳴き止む季節までは、幾らでも繁茂することを繼續する。さうしてしば〳〵しと〳〵と降る雨が空の青さを移したかと思はれるやうに、深い綠が地上をおほうて、さわやかな涼しい陰を作るのである。（長塚節「土」ニ據ル）

第十一課　果樹試作場

こゝに一つの茅屋がある。

なだらかな曲線で形づくられた小高い岡が波のやうにうねつて東から西へ、或はそれが分れて西南へまた西北へと無雜作にはひながら、幾重にも折重なつて、穩やかに美しく續く。それ〲の岡の麓から中腹へかけての斜面には、檜・松・栗又は竹林に交つて、桃や梨の畠が點々と眺められる。今は總べて一つ綠の衣に包まれてゐるが、三月には薄赤く、四月には純白に、それらの岡はあでやかな裾模樣を着けたに違ひない。かういふ岡の一つの、桃畠・梨畠の間に其の茅屋は立つてゐる。

丸木で組まれ、茅で葺かれたさゝやかな其の家は、入口にかゝげられた「果樹試作場」の標札と、部屋の片隅に「農場管理法」「果樹栽培法」などいふ書物が見えなかつたなら、全く岡の裾の廢屋に過ぎないであらう。其の茅屋に村の一青年が、時折の生活を營んでゐる。

彼が此の家に起き臥しするやうになつたのには理由がある。

岡から岡に續く此の神岡村の小學校は、是もやはり岡の一端の背をならして建てられ、後には綠深い樹林を負ひ、前には、向ひの岡との間に開けた水田・果樹園等をひかへて、先づ兒童に農耕の興味を起させるのに適してゐた。殊に水田・畑・檜林・梅林・竹林・松林・栗林・葡萄畠・桃畠・梨

畠・柑橘園・蔬菜園等、村の農作の縮圖として造られた三千坪の農園は、郷土の自然・農事に親しませるに足るものがあつた。此の小學校に彼は學んだ。さうしてあたりの岡が紫色に煙る春の日に、まだ八九歳の幼童に過ぎなかつた彼は、其の級友と一しよに、此の農園の一隅の土を反して草花を植ゑ、苺・梅・梨・桃等を植ゑた。また夕日が半天の雲を紅に染める秋の日に、高等科の兒童であつた彼は、先生の指導に從つて試作した農園の野菜を取入れ、水田の刈取をした。土に親しみ農を樂しむ心を彼はかうして早くも養はれた。さうして進んで補習學校に入つた時、其の學校を農事の試驗場とし、研究場とし、自學自習によつて農法や果樹栽培法を工夫することを仕込まれたのであつた。

其の頃村の一先覺者の記念碑が建てられることがあつた。此の村が嘗て貧窮であつた時代に、――それはかの青年がまだ生まれない頃であつた、――果樹の栽培を思ひ立つた或老人が、村の地質を考へ、幾多の辛酸と莫大の犧牲を拂つて、今まで雜木の茂るにまかせてあつた岡の裾に、桃と梨を植ゑたのであつた。今岡の裾の處々に見える桃や梨の畠は、此の老人の希望と努力の實を結んだものに外ならない。村の誇として、其の話は、此の青年も子供の時から聞かされてゐた。さうし

て彼が補習學校に通つてゐた或日、此の先覺者を追慕する村人達によつて、老人が最初に鍬を下した地に一つの記念碑が建てられた。それ以來、桃や梨の花で色どられた飛模様の綠衣の岡を眺め、或は豐かな珠玉のみのりを目の前に見る毎に、かの先覺者に對する青年の敬慕の心は、一入に深まり行くのであつた。

やがて彼は補習學校の業を終へた。彼は父母の生業を助けると共に、又青年團の一員として、夜の公會堂に藁細工にいそしむことになつた。さうして其の藁細工を賣つて得た收益によつて、共同に購入した多くの圖書を讀破して、新知識を吸收する傍、荒れるがまゝであつた岡の裾を拓いて、桃と梨を植ゑた。それから其の地に茅屋を營んで「果樹試作場」と名づけた。さうして農耕のひまを見ては此處に起臥して、果樹の栽培と改善とに志したのである。

「果樹試作場」はかうして岡の裾に存在してゐる。

なだらかな曲線の岡は、今や次第に濃い綠になりまさりつゝ、此の「果樹試作場」の背後に、靜かに橫たはつてゐる。

第十二課　租稅

國民の福利を增進し、安寧秩序を保持するため、國家として爲すべき事業は甚だ多い。是等の事業を遂行する

第十九課　土に立脚せよ

先般は御病氣の趣御案じ申上げ居候處、御全快の御報に接し、喜悦に堪へず候。

過日御案内申上候通り、去る七月一日午後四時より、本村出身の農學博士横山道雄氏の御講演これあり候。時恰も農繁期に際し、人集りも如何かと懸念致候處、幸に植附も終り少閑を得候ため、村内はもとより他村よりも續々來集致し、聽衆三百に餘り、近頃になき盛會にて候ひき。

講演は約二時間半に及び、内容も多岐にわたり候が、小生の最も感動致候は、最後に農村民の覺悟に就いて述べられたる條に候。博士は此の邊頗る熱誠をこめられ、殆ど聲涙共に下る有様にて、會衆皆傾聽感激致したるやうに見受け候。

博士によれば、農村の振興といひ、農事の改良といひ、農村に關する問題は種々なれども、要するに最も大切なるは、農村民の確乎たる自覺と不拔の決心とに存すとて、大要次の如く述べられ候。

現時に於ける都市の異常なる發達膨脹は、

果して慶すべきか、はた弔すべきか。今や都會の風潮は全國に波及し、其の餘弊として、人心やゝもすれば奢侈を追ひ、浮華を喜び、甚だしきは都會にあこがるゝの極、農村の存在を忘れんとする者あるに至れり。されど試みに思へ、都會は其の基礎を農村に有せざるべからざるを。若し農村徒に疲弊して都會のみ異常の發達膨脹をなさば、そは一種の病的現象にして、寧ろ甚だ危險なりといはざるべからず。

此の時に當りて、農村の人は非常なる自覺と決心となかるべからず。自覺とは何ぞ、即ち農業の尊き使命を知り、之に從事するを以て誇とすること是なり。決心とは何ぞ、即ち浮華輕薄の惡風を顧みず、堅く土に立脚すること是なり。土こそは萬物の母。あらゆる生命と生産とは、其の根元を土に有す。土を離れて人生あるなし。土にこそ絶對無限の價値は存すれ。

土はあらゆる物を淨化す。まことに農民は土の上に精神的殿堂を築け。熱誠と勤勉と、忍苦と努力と、質實と剛健と、卒直と正義と、

29

同情と親切と、自尊と謙遜と、獨立と協同と、あらゆる男性的道義を樹立して、之を都會に送れ。都會が知識を以て農村に敎ふるに對し、農村は道義を以て都會の範たるを期せよ。農村はたとふれば河の上流にして、都會は其の下流なり。上流の水澄みに澄まば、下流自ら清からざらんや。

談終ると共に拍手は會堂をゆるがし申候。平素かゝる催に最も御熱心なる貴兄が、御病氣のため御臨席なかりしは甚だ遺憾と存じ、右概略御報申上候。尚暫くは御加養專一に願上候。

第二十課　夕立雲

畠のものも、田のものも、林のものも、庭のものも、蟲も、牛馬も、犬猫も、人も、あらゆる生きものは皆雨を待ちこがれた。

「おしめりがなければ、街道はほこりで歩けないやうでございます。」

と、甲州街道から毎日仕事に來るおかみさんが言つた。

「これでおしめりさへあれば、ほんたうに好いお盆ですがね。」

と、うちの女中もこぼしてゐた。

目録

第一課 讀書……一
第二課 武藏野……六
第三課 すゝき原……十六
第四課 齋田田植式……十七
第五課 大嘗祭……三十
第六課 祭祀と農業……三十四
第七課 養蠶……三十七
第八課 渡り鳥……四十
第九課 田園の山……四十八
第十課 我が農業と對外貿易……五十二
第十一課 緬羊……五十八
第十二課 ハワイ通信……六十五
第十三課 手紙の認め方……七十四
第十四課 柳生宗矩……七十七
第十五課 國寶……八十三
第十六課 熊本城……八十六
第十七課 ローマの舊都……九十一
第十八課 大樹……九十九
第十九課 鬼怒川の畔……百三
第二十課 土の匂……百九
第二十一課 雪……百十一
第二十二課 鰮場盤……百十五
第二十三課 東西雜話……百十九
第二十四課 ボアソナード君の歸國を送る詞……百二十五
第二十五課 道德と法律……百二十八
第二十六課 鰊……百三十二
第二十七課 ゆく川の……百三十九
第二十八課 蕗の薹……百四十一
第二十九課 峠の茶屋……百四十四
第三十課 國語と愛國心……百五十一

高等小學讀本 巻四 農村用

第一課 讀書

我等は何のために學校に學ぶか。いふまでもなく智能を啓發し、德器を成就するためである。然らば學校を卒業すれば、我等の智德は十分であるか。否々、學問には際限がない。學校で學ぶ知識は九牛の一毛にも過ぎない。至善至德の域に達するのは、畢生の力を盡くしても及び難い。學校は智德の基礎を造る處に過ぎないから、我等は一生を通じて修養に力め、其の大成を期せねばならぬ。

31

今日新なる幸を吸ふ。　（三木操「青き樹かげ」に據る）

第十課　我が農業と對外貿易

我が國の農業は國内の消費を目的とするもので、農産物中直接に國外へ輸出せられるものは極めて少い。試みに大正十五年から昭和三年に至る三年間の統計の平均數字を見ると、豆類(えんどう・いんげんまめ等)の一千百萬圓、蔬菜類の七百萬圓、百合根の二百四十萬圓等が主なものであつて、其の他諸種の物を合計しても、僅かに年額二千數百萬圓に過ぎぬ。隨つて我が内地農産物の輸出高は、内地農産總額の百五十分の一にも達しないのである。故に我が國の農業は、國内に於ける自給を目的とするといつても誤ではない。

しかしかういつたからとて、決して我が農産物が國内に於て加工せられ、工業品として輸出せられることがないといふのではない。否、我が農産物で加工せられ、工業品として國外へ輸送せられるものは、頗る多種であり、多額である。先づ輸出貿易に於て第一位にある生絲を始とし、絹織物・砂糖・茶・小麥粉・麥稈眞田及び其の製品、花筵・疊表・屑絲(絹)・眞綿・人蔘・除蟲菊製劑・植物性油・酒・ビール等、總べてさうでないものはない。生絲だけでも、大正十五年から昭和三年まで三年間の平均輸出額は、七億三千五百萬圓の巨額であり、以上列擧したものを合計

すれば約十億圓に達する。これに國内農產物の加工品で、以上にもれたものの輸出を加へると、尙約二億圓は增加するであらう。更に繰綿・羊毛等、原料を外國から輸入し、之に加工した後我が工業品として輸出するものは、約五億圓に上る。さうして農產物を原料としない金屬製品や、陶器や、機械や、鑛物等の輸出額は、總計約三億圓に過ぎない。以上を總括していへば、我が國の輸出總額約二十億圓の中、約六割が我が農產物の加工品であり、二割五分が輸入農產物の加工品であつて、殘餘の一割五分が、農產物を原料としない物の輸出額である。かう考へてみると、我が國の農業が、間接に我が輸出貿易に對して、非常に大きな貢獻をしてゐることがわかるであらう。

我が國の農業はかくの如く重大な使命を果してゐるが、しかも食糧として、又工業の原料として年々に增加する需要を悉く充たすことは、今日では到底堪へきれぬ所となつた。先づ食糧に就いてみても、朝鮮及び臺灣から内地へ移入する米が、年々二億六千萬圓に達してゐる。これは我が國内に於ける移動であるから無視するとしても、尙此の外に國外から三千萬圓乃至一億二千萬圓の米を輸入してゐる。其の仕入先は印度支那・英領印度及びシャムであり、近年はアメリカ合衆國からも

若干を入れてある。此の外最近では小麥七千萬圓、大豆四千六百萬圓を始め、鷄卵・鳥獸肉等、食糧だけで一年約三億圓を輸入する。更に工業原料として綿の六億三千萬圓、羊毛類の一億四千萬圓、其の他を合はせて約八億圓を算し、之を前述の食糧と合はせれば、農產物の輸入合計一年約十一億圓に上り、最近の我が輸入總額約二十二億圓の半ばを占めてゐる。

農產物が今日の國際貿易上如何に重要な位置にあるかは、以上によつて略、知ることが出來よう。そこで今かりに我が國の農業が、其の生產力の五分を增加したとすれば、優に今日の輸入超過年額約二億圓を補ふことが出來る。其の上かの輸入農產物の中には、或程度まで內國產を以て代へ得るものもあらうから、將來はさういふものの生產を振興することに努めねばならぬ。例へば朝鮮に於ける綿作、內地に於ける緬羊の飼育の如きこれである。朝鮮の綿作は既に相當の成績を擧げてゐるが、內地の農家に於て、副業的に緬羊を飼ふことも今後有望である。鷄卵の如きも嘗ては支那からおびただしい輸入を見たが、其の後內地養鷄業の發達と共に輸入額が減ずるに至つた。之に類することが必ず他の方面にもあるに違ひない。

尙最後に注意すべきは、我が國が年々巨額の肥料を輸

34

入してゐることである。近年に於ける其の輸入額は、實に一年一億一千萬圓を算する。此の肥料の幾分でも自給肥料を以て代用することは、我が農業にとつて必ずしも不可能ではなからう。（那須皓「日本農業論」ニ據ル）

第十一課　緬羊

一　月寒の牧場

廣漠たる月寒(つきさぶ)の牧場は、かゞやかしい陽光の下に緩く波打ちながら、遠く〳〵續いてゐる。一望綠の毛氈(せん)の間に斷續する森や林、見果もつかぬ遙か彼方は煙つたやうに模糊としてゐる。總べてが北海道らしい雄大さである。

牧場の其處此處には、大空に漂ふ雲の塊のやうに、緬羊の薄黑い一團又一團が音もなく遊んでゐる。其の一團毎に附添うてゐる牧夫が、折々口笛を吹き、むちをあげて合圖を與へると、護羊犬が右に走り左に走つて、命令者の意のまゝに緬羊の群を誘導する。若し其の中の幾頭かが、仲間におくれたり列を離れたりすると、犬は後から追迫り、

軍の居城とし、當時の松原つゞきの寒村は、何時しか繁華なる江戸の都會となれり。星霜四百年、明治の大御世に宮城を此處に定め給へるは、道灌の名譽此の上なしとやいはん。

第三課　先づ農を重んぜよ

人は一日も飲食せずにはをられぬ。日々の食料となる米・麥・野菜や、肉類・鷄卵・牛乳など、一として農業の賜でないものはない。

人は着物なしでは暮されぬ。其の着物の原料たる綿・麻・絹・羊毛など、是等もまた農業なくしては産出されないものである。

人は家を要する。其の家を建てるには、種々の木材が必要である。是等の物もやはり農業にまたねばならぬ。

人間の生活に最も必要な衣服・食物・家屋の原料を作るのが農業である以上、農業は他のあらゆる生業に比して、最も根本的のものであるといはねばならぬ。

着物がほしいといふ場合に、我々が呉服屋から反物を買つたとする。其の反物は呉服屋で織つた物ではなく、機織工場で織つた物である。其の織る絲は、製絲工場や紡績工場などで製した物である。しかしながら絲の原料たる繭や綿などは、農業の力にまたねば出來ない物である。農業がなかつたならば、繭もなく、綿もなく、製絲

工場もなく、紡績工場もなく、機織工場もなく、呉服屋もないわけである。

我が國は、神代の昔から既に農業を以て國を立て、随つて之を重んずることが一通りでなかつた。瑞穂の國といふ古稱のあるのも、其の所以であり、歴代の天皇の最も鄭重に行はせ給ふ大嘗祭を始め、一般の祭事に農業に關するものの多いのも、其の所以である。今は廣く生業といふ意味に用ひられてゐる「なりはひ」といふ語は、もと農業の意味であり、「民」といふ漢字を當てる「たみ」といふ語も、農民の意味であるのを見ても、如何に古代か[illegible]外見は文化燦然たるやうに見えても實はしんを白蟻に犯されてゐる木材のやうなものである。故に國家は十分に農業を保護し、尊重せねばならぬ。之に從事する農民も、また自ら其の業務の如何に貴きかを自覺して、大いに自重せねばならぬ。

農民が自重して、徒に都會の流行を追はず、かへつて農村が質實の風を以て國内に範を示すに至つて、始めて國家は健全に發達し得るのである。普佛戰爭にパリーが包圍された時、フランスの農民は、たとひパリーは陷

落しても、フランスは我々農村にある、農村の亡びざる限り、フランスは永久に亡びないと言つたといふ。農民たる者は此の氣概がなくてはならぬ。

第四課　松の根

松の木に圍まれた家の中に住んでゐても、其の根が地中でどうなつてゐるかはあまり考へてみたことがなかつた。美しい赤褐色の幹や枝や、清らかな緑の葉が、松の木の全體であるやうに私は思つてゐた。雨が降ると幹や枝の色は、落ちついたうるほひのある鮮かさを見せる。緑の葉は、涙にぬれたやうなしをらしい色つやを增して來る。雨の後で太陽が輝き出すと、如何にもさわやかな氣分が木に滿ち〳〵て、あたかも生の喜が其處に躍つてゐるやうに感ぜられる。松の木といへば私には唯それだけのやうに見えた。

然るに或時、私は半ば崩された小高い砂山の下にたゝずんで、砂の中に食込んだ複雜な松の根を見たことがあつた。地上と地下の姿、それは何といふ甚だしい相違であらう。すく〳〵とのびた幹、大空にさし交す枝、樂しさうに揃へた葉先、是等に比べて地下の根は、戰ひもがき、苦しみ、精一ぱいの努力を盡くしたやうに曲りくねり、枝から枝と分れた無數の太い根細い根を以て、一せいに大地にしがみついてゐる。私は松の根が地下にあ

俵の山が一つ二つとふえて行く。

「今年も豊年だ。氏神様のお祭には、何でも好きなものを買つてやるぞ。」

と父がほゝゑむ。僕たちの心の中には、もうお祭の笛や太鼓の音が鳴り響いてゐる。

秋晴の空に見上げる柿のこずゑの美しさ。てつぺんにさへづるもずの鋭い聲は、狭い山里に響き渡る。山々の紅葉が赤々と夕日にはえて、美しいと思つてゐる中に、朝夕うすら寒くなつて來て、時雨が降出す。せつかく待ちこがれたお祭にも、冷たい雨にちらちら雪がまじつて降ることが多い。

稲がすつかり刈取られて、水一滴も留めず干上つた田は、僕たちにとつて其のまゝ廣い運動場だ。何處をどうはね廻つても叱られる氣づかひはない。到る處に取殘されてある稲掛に登つて、透きとほる程すんだ冬の青空を望みながら、唱歌を歌ふ。器械體操のまねをする。雪が降つて一尺二尺と積れば、藁靴をはいて銀世界の田の面を走り廻る愉快さ。「へ」の字「ろ」の字の跡をつけて、まだ興が盡きねば、雪ころがし、雪だるま、雪合戰。

冬の山村は全く子供の天地である。

第十一課　教へ草

仕事を追へ、仕事に追はれるな。

5

持で接することが大切ではないか。

第十三課　麥秋

六月になつた。麥秋である。青葉の暗い茂みの間々を、みのつた麥が日の出のやうに明るくする。農家では猫の手でも使ひたい時だ。小學校も農繁休をする。子供一人、どうしてなかなかばかにはならぬ。初旬には蠶が上るのだ。中旬には大麥、下旬には小麥を刈るのだ。

もう梅雨に入つて、じめじめした日が續く。蓑笠で田も植ゑねばならぬ。「田植をしまふとさつぱりする。」と皆が言ふ。雨間を見ては、刈殘りの麥も刈らねばならぬ。刈りおくれると、畠の麥が立つたまゝに粒から芽をふく。油斷を見すまして作物をこのけ顔に增長して來た草も、取らねばならぬ。甘藷の蔓も反さねばならぬ。陸稻やきび・ひえ・大豆の中耕もしなければならぬ。二番茶も摘まねばならぬ。時も時とて飯料の麥をきらしたので、水車に持つて行つて、一晩寢ずの番をして搗いて來ねばならぬ。

空ではまだひばりが根氣よく鳴いてゐる。木立の中では、何時の間にか栗の花が咲いてゐる。田圃の小川では、よしきりが口やかましく終日騷いでゐる。ほとゝぎすが鳴いて行く夜もある。ふくろふが鳴く晩もある。くひながことごとたゝくよひもある。ほたるが出る。せみが

や孵化したばかりの幼蟲を食ひ、又は其の親のイセリヤかひがら蟲の皮膚を破り、內臟を食つて之を殺してしまふ。しかも此のベダリヤてんたう蟲は、頗る貪食であつて、幼蟲のみならず成蟲も盛に相手のイセリヤかひがら蟲を食ひ、殆ど之を全滅させねば止まぬ。唯困つたことには、此の蟲がイセリヤかひがら蟲を大抵食盡くして食物に窮するやうになると、次にはとも食を始めて、ために自分等の種族も全滅するに至るから、再びイセリヤかひがら蟲が發生した場合には、更にベダリヤてんたう蟲をはなして其の驅除を圖らねばならぬ。

第二十一課　夏の田園

片岡に日輝き、
山田の稻葉は光り、
道の粉砂は燒けて、
吹く風に舞上る、
諸聲に鳴くせみ、
今日も暑さう。

草いきれ

右も青田、
左も青田、
中の小道を、

涼しき風さそひて、
しみぐ＼にほふ。

夕暮

村の灯は二つ三つ。
牛追ひて行く方は
落日の名殘して、
ほの明き大空、
涼しげに夕星一つ。
物皆はよみがへる
夏の夕暮。

第二十二課　船津傳次平

船津傳次平は天保三年十月一日上野國勢多郡富士見村に生まる。年少の時より農事に從ひ、日々力耕を怠らず。農閑には父に就きて和漢の學を修め、且數里の遠きに在る算道の師に通ひて、頗る其の道に通じたり。

彼は學問と實地とを分たず。學びし所の知識を悉く農事に應用し、土壤の性質、肥料の配合、種子の選擇、播種の方法等に就いて熱心に研究を進めたり。

選ばれて名主となるや、先づ赤城山の南麓四百餘町の地に松を植ゑて、水源の涵養に資せり。

明治初年、三十六箇村の大總代に任ぜらる。當時此の地方の農家、一般に養蠶を以て專ら婦女子の業となし、之

夜業定めてさびしかるべしと言へば、笑ひて、さびしき中に限なき趣ありとて、

　駒場野や開き殘りにくつわ蟲

といふ句を示せり。

かくて駒場に勤むること八年、其の間實習の指導のみならず、農學の講義をもなし、時々外國人の教師某と見解を異にすることありしが、實驗の結果は必ず彼の言あたれりといふ。

傳次平かつて赤城山に草刈してありし折、ふと一株のかやの際立ちてのびたる樣を見て不思議に思ひ、かやの根元に近寄り見れば、其の傍にやゝ大いなる石あり。此の石日光を遮ぎらずして其の發育を促すことに氣附き、歸りて己が畑の作物の根元に一々石を立てて試みたり。其の實驗に熱心なるかくの如し。

彼後に農商務省に入り、更に農事試驗場に轉じ、技師に任ぜられ、藍綬褒章を賜はれり。晩年郷に歸り、尙農事に盡くしたりしが、明治三十一年六月十五日病歿せり。年六十七。著に「稻作小言」「里芋栽培法」「韮栽培法及び効用」等あり。

東京府飛鳥山の櫻樹立ち並ぶ處、彼の傳を刻したる丈餘の碑あり。其の篆額は大日本農會會頭小松宮彰仁親王の御染筆にかゝり、文章は子爵品川彌二郎の撰なり。

11

「汝が父より傳はりし
祕曲は之にをさめたり。
今の調を耳にしめ、
都路さして歸れ。」とく。

さすが名殘の惜しまれて、
時秋尙も「御後に
從ふべし。」とためらへど、
義光頭をうち振りて、

「我戰場に向ふ身の

野末の露と消えん時、
汝にあらでは此の曲を
誰かは後に傳ふべき。

我は武の爲、家の爲、
汝は世の爲、道の爲、
つゝがなかれ。」と西東
露けき袖を分ちけり。

第三十課　鄉土

山川の風光敢へて誇るべきなく、草木の珍奇敢へて語るべきなしといふなかれ。或は坦々たる田園遠く連な

り、或は山谷に掌大の田園を點綴し、彼處に二軒此處に五軒、川に臨んでは自ら清流の調を聞き、山間に位しては清風時に薫じ來る。都塵を去る百里、空氣自らさわやかに、碧空の深きを仰ぎ、又は大海の洋々たるを望む。郷土の景色よし奇勝にあらずといふも、しかも甚だ愛すべきものあるに非ずや。

山あり、形頂上に於て缺くるが如きを名づけて九合山といふ。傳へいふ、昔天狗此の山を一夜にして造らんとす、成る所九分にして既に夜明けたりと。沼あり、故老いふ、昔長者一日にして其の田を植ゑしめんと欲す、半ばにして日暮れんとしければ、彼の長者扇を以て落日をかへせり、夜明けて見れば、廣大なる田地化して此の沼となると。かゝる種の傳説多く荒唐に似たりといへども、古人木訥の心さながらに通ふが如く、しかも冥々の中に郷人を教誨せしもの少からず。

老樹鬱蒼たる境内に神さびて立てる宮居は、たま〳〵延喜式に其の神名ありて、由緒の古きを知るものあり。

郷人氏神と仰ぎ、ひとしく氏子と稱するものは、祖先以來崇敬の厚かりしところ、詣づる毎に郷土の古を思ひ、心自ら純に、氣自らさわやぐをおぼえん。

地名必ずしも歴史を語るにはあらねど、時に本莊・新莊・今莊等の名に莊園の歴史をうかゞふべく、本郷・横田・新

13

田等の名に郷土發達の跡を尋ぬべく、三日市・五日市・二十日市等の名に昔日の商業を思ふべし。平和なる山川田野も、時に兵馬のちまたと化しけん、要害山と呼び、勢引山と呼び、城山と呼び、陣場野と呼ぶ。是等は口碑と結びて戰國の美談を傳へ、又は文書に參酌して歴史の跡を知るべきもの少からず。

道の邊に咲く野菊の花はさゝやかなれども、思へばそもそも何時の世に芽生えそめ、咲きそめにけん。觀ずれば一輪の野花にも殆ど限知らぬ傳統の存在するを認むべし。我等の據つて立つ郷土は、そも何時の世に開かれ、幾百千年を經て今日に到りしものぞ。穰々たる美田

も、もとこれ祖先の手によりて開墾せられ、欝蒼たる山林、亦其の苦心によりて今日の美を致ししなるべし。我等の父母はもとより、祖父母も曾祖父母もかつて此の郷土に嬉戲し、此の郷土に人となり、彼の田圃を耕し、彼の森林を養ひつらん。一片の月山上にかゝる時、自ら故人をしのびてうたゝ感慨の深きをおぼゆ。

郷土の由來を知り、其の今日に至れる跡を尋ぬる時、始めて之に對する眞の理解を生じ、隨つて之を愛する情の油然たるものあるを見るべし。祖先の苦心經營を知らば、其の遺業も益意義を加へ、郷土の產業も其の由來する所を察せば、或は更に之を發達せしむる途あるを

發見せん。故老に問ひ、口碑に尋ね、傳説に察して郷土變遷の大略を知らば、故人も舊知の感あり。悠久たる往時も之を目前に見るが如き心地すべし。山川すべて情あり、愛郷の心切ならざらんとするも得べけんや。

高等小學讀本　卷一　終

農業によつて先づ養はれる徳は、着實であり、勤勉である。如何にあせつてみたところで、昨日植ゑた苗が今日實のるものではない。或男が、田植の翌日から毎朝稻を少しづつ引張つて、早く成長させようとしたら、やがて枯れてしまつたといふ笑ひ話もある。一足飛は農業の禁物である。しかも唯自然に任せて氣長く待つてゐるばかりで、作物は出來るものではない。人力の限を盡くして始めて自然に任せる、そこに自ら勤勉着實の美風も養はれるのである。

農業は最もよく家庭の和樂を與へるものである。耕すにも、種を蒔くにも、肥料を施すにも、除草するにも、一家

総出で働くから、家内各自が其の職業を理解し、隨つて彼等の間に美しい同情の念が起る。夕飯の膳に向ふ時、互に慰め合ふことの出來る彼等は、一日の勞苦をこゝに忘れて、一家一心の妙趣を十分に味はふことが出來る。

農業は最も趣味に富んだ職業である。終日自然を友として働いてゐる農夫は、又忠實な自然の觀察者である。しかも彼等は唯傍觀的に自然を樂しむ風流者ではない。深い同情の念とあらゆる辛苦とを以て、木を植ゑ、田畑を耕す。其の勞作によつて、山は愈〻其の美を發揮し、野は益〻其の趣を添へる。

第二課　村の秋

一

十月だ。稲の秋。地に黄金の穂波が明るく照渡る。早稲からだん〳〵米になつて行く。性急にもずが鳴く。日が短くなる。赤とんぼが夕日の空に數限もなく亂れる。柿がいゝ色に照つて來る。或寒い朝、ふと見ると富士の北の一角に白いものが見える。雨でも降つた後の冷たい朝には、水霜が置いてゐる。

十月は雨の月だ。雨が續いた後では、雜木林にきのこが出る。野ら仕事をせぬ腰の曲つたぢいさんや、赤ん坊を負つた女の子などが、ざるをかゝへて採りに來る。楢茸・しめぢ茸・初茸はめつたになく、多いのが油坊主といふきのこだ。一雨々々に氣は冷えて行く。田も林も日に日に色づいて行く。甘藷が掘られて、續々都へ運ばれる。

茶の花が咲く。雜木林の楢にからんだ自然薯の葉が黄になり、藪からさし出たぬるでが目のさめるやうな紅になり、御納戸色の小さなコップを幾つも連ねてりんだうが咲く。櫟の木の下は、どんぐりがはらきて痛く程だ。

もうゑんどうやそらまめも蒔かねばならぬ。蕎麥も霜前に刈らねばならぬ。まだそれよりも農家の一大事、月の下旬から來月初旬にかけて、麥蒔がはじまる。後押しの二人もついて、山の如く堆肥を積んだ車が頻に通る。